『妙夢』を核とした空間の秩序

―札幌駅ウエストアベニューにおける人々の行動―

高橋 佑希

キーワード：パブリック・アート/エージェンシー/芸術の人類学/
散漫な社会的場面/空間の秩序

要　旨

本稿は、札幌駅西口のウエストアベニューに設置されている安田侃の彫刻作品『妙夢』周辺におけるフィールドワーク調査により、『妙夢』は、なぜウエストアベニュー利用者に「鑑賞」ではなく「待ち合わせ」をさせるのか、利用者の行動から明らかにすることを目的とする。まず、第 1 章では、なぜ札幌駅西口『妙夢』周辺のウエストアベニューをフィールドとして選んだのか私の経験から説明し、このフィールドを研究する目的を述べる。第 2 章では、都市人類学と芸術人類学の両面から先行研究を検討し、本研究の立場を示す。第 3 章では、フィールドであるウエストアベニューについての基本的な情報を概説し、フィールドワークの概要および倫理上の注意点について述べる。

第 4 章では、フィールドワーク中に出逢った様々な事例を通して、ウエストアベニュー利用者の行動を描き出す。調査により、ウエストアベニュー利用者の行動は、一般的に起こる「待つ」という行動と、ウエストアベニューだからこそ発生するが一般的とは言えない行動に分類される。「待つ」行動は、『妙夢』が周辺に「留まるための場所」と「留まっても良い場所」という機能を発信させていることによって発生し、ウエストアベニューではその機能による秩序が維持されていることが示唆される。続く第 5 章では、描き出された行動についての検討をもとに、ウエストアベニューが「散漫な社会的場面」であり、そうした状況下で発生している秩序が、『妙夢』を鑑賞する行為よりも待つ行為の方を優先させていることを示す。続いて、「散漫な社会的場面」の形成は、『妙夢』が設置されてからの 19 年間で、利用者が徐々に美術的な価値よりも機能的な価値に重きを置いて『妙夢』を見た結果だと明らかにする。最後の第 6 章では、ウエストアベニューでのフィールド調査を総括し、『妙夢』によって形成された秩序が「鑑賞」と「待つ」という 2 つの行為を同時並行的に発生させることを阻害すると同時に、「待つ」行為の優先順位を高めた結果、利用者に「鑑賞」ではなく「待つ」行為をさせると結論づけ、美術作品とその周辺空間および空間利用者の関係性に関する考察を行う。